

Kukuna だより(第3号)

こ いっぽ ふ だ
子どもが一步を踏み出すために

ふとうこう こ じぶん さいはっけん あんしんかん も いっぽ ふ だ おとな
不登校の子どもたちが「自分を再発見し、安心感を持って一步を踏み出すためには、大人が
ひょうかしや ばんそうしゃ あんぜん き ち ふ かけつ
「評価者」ではなく「伴走者(安全基地)」であることが不可欠です。

ぐたいてき こえ みまも こうかてき はな
具体的にどのような声かけや見守りが効果的なのか3つのポイントについてお話します。

1 「Doing(行為)ではなく「Being(存在)」を肯定する

ふとうこう こ がっこう い じぶん つよ し こ ひていかん も
不登校の子どもたちは「学校に行けない自分はダメだ」という強い自己否定感を持っていること
おほ なに いじょう
が多いです。そのため、「何かができたこと(Doing)」をほめる以上に「そこにいること(Being)」
よろこ しせい あんしん ちよっけつ
を喜ぶ姿勢が安心に直結します。

○ 具体的な声かけ

「おはよう、今日も顔が見られてうれしいよ」

「いっしょにご飯を食われてよかった」

「あなたがここにいてくれるだけで安心するよ」

なに とくべつ せいか だ にちじょう
何か特別な成果を出したときだけでなく、日常の
あ まえ しゅんかん そんざい みと
当たり前瞬間に「あなたの存在そのものを認め
ている」というメッセージを送り続けることです。



2 「評価」を「実況中継」に変える

「すごいね」「えらいね」といった評価の言葉は、時に子どもにとって「次も期待に応えなければなら
ない」というプレッシャーになることがあります。代わりに、おとな み つた じっきょうちゅうけい
大人が見たままを伝える「実況中継」の
こえ こ じ こ にんしき たす
声かけが、子どもの自己認識を助けます。

○ 具体的な声かけ

「今日は久しぶりに外の空気を吸ったんだね」

「さっき、少し笑っていたね」

「この色、とても丁寧に塗っているのが伝わってくるよ」

よ わる はんだん
良い、悪いを判断するのではなく、ただ「あなたの
こ み じじつ つた こ
ことを見ているよ」という事実を伝えることで、子ど
もは自分を「見てくれている」という安心感を得るのです。



3 「信頼して待つ」という能動的な見守り

見守ることは、単に「放っておく」ことではありません。子どもが試行錯誤したり、時には立ち止まったりすることを「今は必要な時間なんだ」と信じて待つ、非常にエネルギーのいる能動的な行為です。

○ 見守りの姿勢

- ・沈黙を恐れない：子どもが話したすまで急かさずに待つ。
- ・「助けが必要な時はいつでもここにいる」という空気感
常に干渉するのではなく、子どもが振り返ったときに必ず目が合う距離感を保つ。



【安心感をはぐくむコミュニケーションのイメージ】

項目	プレッシャーになる関わり	安心感につながる関わり
視点	「なぜできないのか」という欠点注目	「今どうしているか」という現状肯定
言葉	「～すべき」「頑張れ」という励まし	「～だね」「そうなんだね」という共感
距離感	先回りして問題を解決しようとする	失敗しても大丈夫な環境で後ろから支える

子どもにとっての安心感とは、「ありのままの自分が受け入れられている」という確信です。まずは、大人が安心感という栄養を注ぎ続けることで、子どもは自分の力で「自分」という根を張り、再び成長し始めるのです。こうした「待つ」「見守る」という姿勢を継続する中で、周囲の大人はどう折り合いをつけていけばよいのでしょうか。

周囲の大人の折り合いのつけ方は・・・

「大人の心の安定度＝子どもの心の安全度」

子どもは、大人以上に「大人のまとう空気感」を敏感に察知します。大人が自分の不安を解消するために子どもを動かそうとすると、子どもは心を閉ざしてしまいます。

周囲の大人が折り合いをつけるということは、決して諦めることではなく、「大人自身が自分の人生や日常を大切に、機嫌よくすごすこと」にほかなりません。大人が楽しそうに、あるいは穏やかに生きている姿を見せること自体が、子どもにとって「未来への希望」という最大の支援になると考えます。

施設見学や教育相談を受付けています。

※前日までに予約してください。

電話 079-661-9019

ククナの6月の予定

24日(水) スタッフ会議

※24日は14時30分までに迎えをお願いします